

文化映画紹介

「フクロウ人形の秘密」

映学社作品

渡部実

【スタッフ】企画・制作統括・脚本・編集・監督・高木裕巳 撮影／中井正義 照明／長谷川明夫 録音／西島房宏 助監督／齋藤隆也 制作担当／下川和裕 出演／藤田朋子、大槻修治、清田美桜、米田弥央、渡辺慎一郎、福地展成、高橋雄祐、鯉沼トキ、小野田せつかく、戸張美佳、若林元太、世志男、新井萌心、前田織音 脚本取材協力／小畑輝海 更生保護法人両全会理事長、石附弘 日本市民安全学会会長、大川哲次弁護士（篤志面接委員）、石川正興 早稲田大学法学部名誉教授、木村清 渋谷区更生保護協力事業主会会長 撮影協力／川越少年刑務所、府中刑務所、松本少年刑務所、東京都板橋区立

中台小学校 詩の引用元／寮美千子編『世界はもつと美しくなる 奈良少年刑務所詩集』 後援／法務省 企画協力／更生保護法人両全会 制作・著作／株式会社映学社 完成／2020年 DVD作品 30分

【内容】現在、何らかの理由で犯罪に手を染め、刑務所に服役している人たちは、刑期を終えた後社会に復帰するが、残念なことにそのうちの何割かは再犯を繰り返すという。その割合は実に二人に一人という深刻なもの。再犯の背景には、刑務所を出所してもその後、職と住まいを十分に確保できず、地域でも孤立しがちだという事情がある。統計によれば、再犯の割合は、

職を得た人が7・7%であるのに対し、無職者は24・7%と高く、3倍以上である。そこでどのように再犯を減らしてゆかが問題だ。

今回の映画「フクロウ人形の秘密」は法務省が主唱するキャンペーン『社会を明るくする運動』の一環として全国の小・中学生を対象に実施されている作文コンテストで、法務大臣賞を受賞した小学生（女子）の作文を原案にしていく。そして、その作文に受刑者の存在と思いを仮託させ、受刑者が出所後も社会で更生をなし復帰していく様子を脚色して短篇劇映画で描いた作品である。

物語は思いがけぬところから始まる。主人公の少女ユキ

は母と訪れた刑務所の展示即売所（受刑者が作った製品を販売している場所）で木彫りのフクロウの人形を見つける。その人形は黒い木の胴体に黄色の目がある魅力的な人形だった。数日後、ユキはあの人形がどうしても忘れられず即売所を訪ねてみる。彼女は人形を買い求め、罪を犯した人がこんな素敵な作品を作るなんて」と意外な感想を抱く。すると即売所にいた女性刑務官（藤田朋子）が、そのフクロウ人形がどのようにして作られたか、といういきさつを丁寧に教える。彼女はこの人形が、少年刑務所受刑者の更生を目的とした教育プログラムの一環として作られたものであることや、受刑者はこの

ような作品を一生懸命作ることによって心が落ち着いていくんだということも語った。少女は「私は犯罪者というのは、心のない凶悪な人と思ひ込んでいましたが、このような人形を夢中になって作れるんだから、もともと善良な心の持ち主だったかもしれないと思うようになった……。そして私はなぜ、彼らが罪を犯してしまったのか知りたくなかった」と語る。

保護司の役割と存在

そこから映画は、少年刑務所に入所している一人の青年を例に挙げ、家庭の貧困、虐待など、青年の家庭環境を描き出し、青年が少年刑務所に入れられてしまう過程を見つ



めていく。青年一人が初めから悪いのではなく、不幸にしているいろいろと劣悪な要素が重なってしまい非行に走り、少年刑務所に入れられるというケースが現実にあることを伝えていく。このあたりを、映画は分かりやすいドラマで描いている。少年刑務所は26歳未満の人を収容するところである。出所しても本人たちは若い。そこで、出所した人たちがどうして再び犯罪者となるのか。

さらに映画は保護司をしているユキの祖父のエピソードに繋げていく。保護司は保護司法、更生保護法に基づき、法務大臣から委嘱された非常勤の国家公務員である。犯罪や非行に陥った人の更生を任務とする。保護司は出所した人々がなんとか社会復帰するまで支えるボランティア的な性格を持つ仕事といえよう。祖父は孫娘のユキに自分の保護司の体験談を聞かせる。祖父から見れば初犯から再犯までの間に横たわるものに、やはり家庭の問題は大きいと

言う。非行に至るまでには、親子の複雑な心の糸がからんでいて、それを一本一本ほどいていくのは大変な苦労がいる。そのような問題を前に、我々一般人にもあまり知られていない、保護司独特の役割を紹介する。20代の若者たちは出所してからも、将来の身の置き方に不安を持っている。そこで保護司は仮釈放の時にも、本人の両親と打ち合わせをしたり、準備をする。そこで保護司は就職先が無事に見つかるまで、青年と話し合い、いろいろと相談にのる。就職先に対しても、保護者の立場でもって雇用主を説得したりもする。これはなかなか人から見えない仕事だが、地味でありながら、実は大変な労力のある仕事であることが分かる。

この映画はユキという小学校高学年の女子児童のフクロウ人形にまつわる疑問から始まった物語だが、ユキの見聞を描いていくうちに、少年刑務所に服役している若い受刑者がこのような素敵な人形を

作ったことから、いつしかユキの犯罪者から受けるイメージが変わっていく。あんなに可愛い人形を作る人がどうして犯罪を犯すのか？ と。そこで映画はそこに至る理由を示し、服役を終えて社会に復帰しようとしても、それは本人と保護司の努力にかかっているという難しい現実を見せる。

そんな保護司にとって嬉しい出来事は、以前世話した受刑者が立派に社会人として復帰を果たし、保護司に挨拶に来てくれることであるという。おそらくは、今まで保護司の役割と存在を取り上げた映画はあまり見られなかったように思う。この映画は短篇劇映画の体裁をとりながら、可愛いフクロウ人形と少女の出会いから、社会における犯罪と犯罪者の更生の様子を簡潔な演出でうまく描いている作品である。

（小学校高学年以上・一般向け）
問い合わせ／映学社 03-3359-1972 9